

精神分裂病患者の自我境界としての身体像境界: ロールシャッハ・テストによる精神病理学的検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/15214

学位授与番号	医博乙第1285号		
学位授与年月日	平成6年3月16日		
氏名	木場 清子		
学位論文題目	精神分裂病患者の自我境界としての身体像境界 — ロールシャッハ・テストによる精神病理学的検討 —		
論文審査委員	主査 教授	山口 成良	
	副査 教授	高守 正治	
	教授	山下 純宏	

内容の要旨および審査の結果の要旨

精神分裂病患者は、しばしば本来自己に所属していない物や他人が自分の体の中に入り込んでいくと、自分の身体から何かが漏れ出ていくと訴える。Schneiderは精神分裂病の第一級症状として、幻聴、思考化声、思考伝播、思考奪取、思考吸入、思考干渉、作為体験および妄想知覚を挙げたが、そのうちの幻覚と妄想知覚を除いた症状を、「自我の輪郭喪失」としてまとめた。

本研究では、これらの症状を自己と外界の境界（自我境界、ego boundary）の障害として捉え、投影法性格検査であるロールシャッハ・テスト（RT）の身体像境界得点（body image boundary scores）によって精神病理学的に検討した。対象の患者群はWHOのICD-9によって精神分裂病と診断された150名（男性90名、女性60名、平均年齢 25.51 ± 4.41 （SD）歳）であり、全員が入院中にRTと成人用知能検査（WAIS）を受検しており、IQが70未満の者は精神遅滞が疑われるので対象から除外してある。対照の正常群は116名（男性67名、女性49名）で平均年齢は 21.47 ± 1.71 （SD）歳である。

その結果、患者群は正常群よりRTの反応の境界が防護的性質をもつ防壁反応得点（barrier score）の比率が有意に低く、反応の境界が曖昧になっていることを表す浸透反応得点（penetration score）の比率が有意に高かった。次に、患者群についてSchneiderの第一級症状の有無によって2群に分けて身体像境界得点を比較した。第一級症状がある患者（93名）とない患者（57名）では年齢、権病期間、知能水準およびRTの反応数に差はなかったが、第一級症状がある患者はそれがない患者より有意に高い浸透反応得点を示した。さらに精神分裂病の診断に重要な症状である妄想の有無による比較では、妄想をもつ患者（94名）ともたない患者（56名）との間に統計学的に有意差を示す変数はなかった。しかし、妄想をもつ患者の方が知能指数、RTの反応数および防壁反応から浸透反応を引いた得点が高い傾向があった。妄想と第一級症状の両方がある患者とどちらもない患者、いわゆる陽性分裂病（I型）と陰性分裂病（II型）について比較したところ、前者の反応数が有意に多かったが、その他の変数に差はなかった。また、第一級症状の幻聴のみを取り出して、幻聴があって妄想がない患者（25名）と幻聴がなくて妄想がある患者（40名）、すなわち幻覚型と妄想型を比較すると、幻覚型が妄想型よりも浸透反応得点が有意に高く、防壁反応得点から浸透反応得点を引いた差（barrier-penetration）が低い傾向を示した。

以上の成績から、精神分裂病患者は社会に適応している正常者に比べてRTの反応に投影される身体像境界が曖昧になっていること、精神分裂病患者の中でもSchneiderの第一級症状がある場合や幻聴があって妄想がない場合の方がその逆の場合より身体像境界が障害されていることが明らかになった。すなわち人は身体像境界をもって自己と非自己を区別しているのであり、それは単に身体の外側部分にとどまらず、心理学的な自我と非自我を区別する機能をもった自我境界であると結論された。そして、精神分裂病患者の多くはその自我境界が障害されていて、外界から独立した個としての存在を保証されなくなった状態であると考えられた。

以上、本研究は、精神分裂病の自我意識障害の病理について、ロールシャッハ・テストを応用して、その身体像境界が障害されていることを精神病理学的に明らかにしたものであり、臨床精神医学に寄与する労作と評価された。